

強度行動障害の発生機序とその対応

反動的行為として生じる行動障害

混乱や不安、緊張、不満などが起因となり、言語的な要素を含めた訴えや投げかけといった自己表現方法の1つの手段として自傷行為や破壊行為をあらわす。

逃避的行為として生じる行動障害

現実の重みから逃げたいという欲求から生じる行為であり、自分の許容量を超えるような状況や場面・人からの働きかけを求められて追いこまれることから、本人が意識する・しないにも関わらず、自己防衛的な感覚を働かせて外界の刺激をシャットアウトしたり、対象物や相手を自分の空想的世界の中に引きずりこもうとする。

また、行動障害の背景となるフラストレーションや怒りに対して、そこに至るまでの原因を自分で理解できておらず、なんとなく苛立っている場合や、理解しているにも関わらず、それを人に伝える方法が分からなかったり、逆に、それを伝えられたところで、何の解決にもならないことを学習してしまっていることが多い。

こういったことから、行動障害を未然に防ぐためには、その問題となる行動の要因を共に探り、整理して本人に伝える、もしくは本人に気付かせながら意識させた上で、その不安となる対象を取り除いたり、気持ちを受け止めながら整理させていくなどといった対処法を導くことである。

その具体的な例をあげてみると、余暇の時間に何かしら共通の遊びに何気なく気持ちを向けながら、今、彼の生活の中にある不安や不満などを会話から拾い上げたり、援助者がそれを感じ取って自覚を促してみたり、励ましたり、解決の方法を導いていくようなカウンセリングを定期的に行う事で日常のストレスや不満から生じる行動障害が強度に至ることを防止していくことが出来ていった事例があり、こうした、彼らの日常生活の中で生じてくる問題に対して、キーパーソンとなる援助者が定期的に心のケアを行うことが非常に重要であることを実感している。

否定的行為として生じる行動障害

対人関係どころか自分に対しても、不快感、或いは、あきらめているなど、ネガティブになっている状態。特に、外傷体験を兼ね備えた不滿意識がはっきりと根付いており、他者を近づけないように、粗暴・他害行為や不潔行為などといった業と人の嫌がる行動をとって人からの働きかけに対して回避システムをつくりあげていることが多い。これが俗に行動障害と称されるものであることが多い。

この行為は表面的にとらわれがちであるが、深層要因として、上記のような不満が解決されていなかったり、或いは逃げ道をふさがれて追いこまれてしまった体験が複雑に絡み

合っており、行動障害の引き金となっている直接的な体験を探り出すことは非常に困難になってしまっている。そのため、粘り強く、彼の中にある人に対する印象を変えていくような関わりを積み重ねていかなければならない。ここで彼らが此方を意識してわざと向けてくる行動に対して、此方が否定的な態度で取りあうのではなく、日常生活の中で「自分のことを分かってもらえている、理解してもらえているのだ」という、対人関係において肯定的なイメージを植え付けるような工夫を行いながら接することで、初めて改善を期待していくことが出来る。

以上の流れが行動障害を強度化していくメカニズムとその対処方法の 1 つであり、これを A ラインと仮設する。しかし、強度な行動障害を有する人達に接していると、このラインだけでは理解不可能・改善不可能な行動障害に出合う経験をすることがある。そこで、そのもう 1 つのラインについて、これまでの経験から事例を交えて考察し、その対応方法を導き出していこうと思う。

自閉的な感覚・衝動的行為として生じる行動障害

生まれ持った幸・不運か、生育暦の中で経験的に培っていくものか、そのどちらとも言い切り難いほど、人の求める感覚的な世界や対象はそれぞれである。我々、人間は常に自分の中で秩序や世界観、感覚的な充足感を作り、それを頼りにしながら生活している。その良い例として、我々は宗教や法律、或いは家族や好意的な人物を常に意識しながら行動の選択を行っていることがあげられる。そこで、もし、この人と人とを結んでいる糸が自分の中で切れてしまったら、つまり、自分の中で人の存在を意識しないようになると、我々はどんな行動を取るであろうか？ 確かに、ある意味では気は楽になるかもしれないし、自由好き勝手に出来て良いかもしれない。しかし、それで本当に楽になれるのであろうか？ 本当に我々は他者を無視した、人を抛り所としない人生に耐えていくことが出来るのであろうか？ また、自己刺激というものは、求めれば求めるほどに強いものを欲してしまって、ここで、自分に何かしらの行動規制となる機能を有さないことには、自己破滅・破綻者になってしまうことは言うまでもない。我々が、自分の行動に規制をかけているのも、やはり心に他者が宿っているからであり、煩わしいな、と思いながらも、心に他者を宿すことで自分というものを守っていることに気付かされるのである。前触れが長くなったが、こうしてみると、なるほど自己確立とは人によって支えられているのだということが分かる。すると、我々とは興味の対象等に違いはあれども、自閉症の人たちにも同じ事が言えるのではないだろうか。いや、尚更に彼らは人が居る生活が必要とされているのではないだろうか。自分で狩をして生活するような原始時代ならまだしも現代社会の中で、他者を廃し、自分の世界に埋没して生活していくことは我々以上に不可能なはずである。もし、それが可能という意見があるならば、それはお互いが「援助」に気が付いていないのではないかと思われるのだが、どうであろうか。実は、ここが非常に重要なことなのだ。

例えば、母親に目の前に差し出された食事を「お母さんがつくって、運んでくれた」と想定することが、彼等はその障害特性からも非常に苦手である。まして、その食材費は父親が稼いできているという考えまでは到底及びにくい。場面や状況を分断して取入れている彼等には、そのままでは「目の前に自然に食事が並べられて食べている」という意識しか持たないのである。これが、彼等の他者が心に宿り難い所以であり、欲に身を任せてお代わりを要求してしまうような我がままや、区切りがつかない程にエスカレートした行動を突き通していってしまう原因であるように思えてならない。そこで、我々はその援助の部分に彼等に意識してもらえるように工夫していくことが非常に大事になってくるのだ。これについて、事例を交えながら述べてみることにする。A君は人にお代わりを要求してくる時、1度お皿を空にかざしてから人に手渡すというパターンを自分でつくっていた。何気ないことなので、見逃してしまう行為なのだが、敢えて「それではいけない」と彼のやり方を認めず、やり直しを求め、「こちらの目を見ながら皿を手渡す」という要求を返していく。すると彼はハッとしてから、自分の要求を押し通そうとして無理やりに皿を手渡して追いやろうとしてきた。そこで、此方からは「A君は、自分独りで食事をしているのではない、私と一緒に食事をしているのです。私の指示を聞き入れないと、おかわりは持ってきませんよ」というように、彼に「自分独りで食事しているのではない、自然に食べ物が並べられているのではない、人からの援助のもとで自分は食事が出来ているのだ」ということを意識してもらうように関わっていくのである（こういった関わりは、先に彼の中での人に対する信頼関係が回復してきた時点で行ったために成功した例であるが、これが先のネガティブな状態の時には、全く違った対応が求められる。また、このように関わらなくとも、既に他者を意識した自立的行動をとれる人には必要のないことであり、この判断力が援助者に必然的に求められる）。このように、生活の各場面でチャンスを伺いながら、意図的に彼の心に人の存在（他者からの援助があって生活が成り立っていること）を植え付け、それを意識してもらいながら生活を組み立てていくことが大事なのである。我々、援助者だって、彼らに自分の存在に気付き、受け入れてもらいたいのは当然であり、それが認められなければ、人を援助する仕事にやり甲斐というのは持てない。わがままな事ばかり言われ続けて、自分の要求や存在を認めてもらえず、その人の手先のように扱われることで良い気分がするはずがない。それでは、どのようにすれば、相手に自分を気付いてもらえるのか、自分の存在を、どのようにインプットしていけるのかということのチャンスを常にうかがいながら援助を行うことが専門性にかかわることなのである。（特に施設の中では、生活を構造化するだけで終わるのではなく、そのスケジュールを彼等にプロデュースしている援助者の存在に気付かせていくことが大事である）

次に、その人を意識した生活の中で、刺激から溢れてくる衝動を抑制・コントロールする機能（自分の欲求と社会的な行為との折り合い）を互いの関係の中で具体化させながら身につけていくことに目を向けなければならない。初めは、刺激に対する衝動から生じる激しい行動障害に対して、刺激物を取り除くことや、押さえる・強引にやり過ごすことで

抑制させざる得ないこともあるが、それで済ませていくのではなく、その機能を何らかの形に変化させていくことが重要になってくるのである。押さえながらも声をかけ、言い聞かせをしていくことによって、そのコントロール機能を言語的なものへと変化させていけることが理想的である（自閉症の人には言葉が通じにくいものだときらめないで欲しい、此方があきらめれば、伝わるはずのものも伝わらなくなってしまう）。これには、互いの中で「衝動を抑える・気持ちを切り離してやり過ごす」ことへの成功体験の積み重ね、肯定的なイメージを育てていくことが不可欠なポイントとなってくる。そして、もう1つここで大切になることは、賞罰を与える側と与えられる側という対立した関係をとるのではなく、「共にハードルを乗り越えていこう」という、援助者の共感的な態度である。一方的に彼独りに委ねていくのではなく、彼の中にコントロール機能を導き、共に支え、育てていくという共感をもとにした自我援助（本人の努力しよう、乗り切ろうとしている気持ちを肯定しながら強化させていく援助）が不可欠となってくるのである。

また、こうした中で、彼等が此方を伺いながら明らかにわざと問題行動を仕掛けようとしてくることがある。これには、此方の反応を伺い試していることも考えられるが、むしろ逆に「踏みとどまれる自分」或いは「その人と一緒に踏みとどまれる関係性」を確認しようとしていると感じ取ることの方が多いことに気付かされる。なぜなら、わざと此方に嫌がらせを行おうと考えているのならば、幾ら止めに入っても、決して踏みとどまることはないだろうからである。

上述した内容の実践例が、自閉症の B 君が見せた「しょうがない」という相槌の投げかけである。彼は、刺激に対して自分が突発的に思いついた事を衝動的な行動に移して失敗体験を重ねてしまう問題性を持っていた。自分の受けた刺激に対して、自閉的な価値観のもとで反応してしまい、行動を起こした後で自分のした事に後悔するという悪循環を繰り返し、更に自分の中でその衝動性を許容量以上に高めてしまったため、社会生活が困難となり、親元を離れて入所する運びとなってしまうのである。しかし、その原因には何よりも、その彼が思いつめて求めてしまう手応えが非常に反社会的な破壊行為や他害行為に結びつくことが大きかった。入所当初も、彼は自分の思いついた手応えに対して衝動的に動いてしまい、それを職員に止められて自分で後々に後悔することに気付きながらも、その衝動性を押さえることが出来ずにとてもしんどいた。しかし、その結果に対して彼を責めるのではなく、共に衝動を抑えようと、時には体を押さえたり、強引にその場から引き離して気持ちを切り替えるような関わりを粘り強く続けていくことにより、最終的には「(気になるのだけれども)しょうがない」という相槌を此方に求めてくることで、その衝動に囚われた気持ちを自ら切り離すことが出来ていったのである。この「しょうがない」という言語概念とともに、今まで彼の中で浮き沈みしていた他者というものが心の中に根を張り、彼の行動基準に影響を及ぼしていることが伺えるのである。個人差はあれど、実はかなりの部分で我々も社会的な行為としてこの「しょうがない」を受け入れて過ごしているのである。

意図的に人に向けられた否定的な行為は、理解のある人からの対処により、自分が人から脅かされないという安心感を培うことで鎮静化を得られていくが、対物・対人への衝動的な行為に対しては、社会的な価値観を享受しながら「あきあめる」「あきらめられた」「とりあわずにすんだ」という成功体験を自分の中で積み重ねていくこと、すなわち気持ちを共有することの出来る援助者のもとで人を意識した行動を積み重ねていくことによって心に他者が宿り、社会的なスキルやトレランスが育っていくことがとても大切なのである。これが、関係理論をもとにした援助形態であり、受容的（理解）のもとで行われる交流療育である。

そして、もう1つ援助者が非常に気を付けなくてはならないことは、己の感情を優先させることはもってのほか、逆に一生懸命になり過ぎて、自分の行動を客観的にみることができずに、彼等にあつかましく思われる存在、つまり、逆に心理的な負担や緊張感などを誘発させてしまうような存在になっていないかどうかを常に省みることである。自閉症者もユーモアのある、気の置ける関係を人に求めているのである。特に、行動障害の激しい人と一緒に居ると、張り詰めた空間にお互いに息がつまり、苦しくなって行動障害を助長させてしまいがちである。リラックスしたムードをつくりあげることにも援助者にとって不可欠なのだ。片や、真剣に取りあって言い聞かせ、片やリラックスしたムードで接するという、援助者は常にメリハリとバランスのとれた強い精神状態を求められるのである。